

第27回日本文化デザイン会議 なごや・せと

工斗藝術大学



JAPAN INTER-DESIGN FORUM '2005

*Nagoya,
Seto*

名誉教授 シンポジウム



黒川 紀章
河合 隼雄
千住 博
マリ・クリスティーン

それまでの工業化社会は大量生産して、庶民でも生活必需品が買えるようにした社会です。発展途上国の近代化というのは、そんな形で進んできた。しかしこれが情報化社会になると、ちょっと困った問題が出てくる。情報化社会というのは、みんな同じじゃ意味がないんです。一人ひとりが違う情報や個性を持ち、それを受発信することに意味がある。意見が違って当然の時代、つまり、多様化の時代なわけです。こういう時代になると、個性的な意見を持つ努力をしないと行けない。相当勉強しなきゃいけないし、個性を磨かないと生き延びていけないんですね。

判りやすい例で言うと、車は性能やスピードだけでなく、それが本当に自分のライフスタイルに合うデザインかどうかとか、感性という付加価値を物差しにして買う買わないを判断する。情報化産業の基を成しているのは、創造的な個性。それをどう世界にアピールできるか、それが文化の違いなんです。本来文化と経済は対立してるわけじゃなくて、メセナでお金もらわなきゃできないもんでもない。ある本によると、アメリカのGDPの三〇%以上をクリエイティブな仕事の分野が稼いでるとあります。アメリカの二十一世紀戦略は、徹底的に文化芸術に投資することだと宣言してる。それで外務省も慌てていま文化外交だとか言ってますが、文化なんてどこか他にあったものじゃなくて、すでに情報化社会に組み込まれてるものだから、文化を特殊なものと考えないで…そんな議論ができれば、今日は面白いかなと思います。

マリ ありがとうございます。では、河合さん。河合 そうですね、文化芸術ということが自分の生活とはかけ離れた部分にあると思うのは間違いで、メセナもいま随分変わりつつありますね。私の本職は人の悩みを聞くことなんです。いま日本が一番多いのがうつ病。「生きてても仕方がない」と言う人が、フツと窓が開けることがある。その瞬間が興味深い。「実は高校時代に絵を描いてた」とか言いだして、「じゃあ描いてみたら」と言うと、それが結構うまくて……あるいは景色に感動して短歌や俳句にしたためる人もいます。「それ、新聞に出せば？」って言うと、一発で掲載されたりしてえらい元氣になりましたね。人生が変わるんですよ、その人の。

ただ、不思議なことに、その窓が人によつてどこに開けるかはわからない。それはその人が探すのであって、僕には探せない。見つかるまでは、死ぬほどの世界をずっと付き合っただけなんです。ずーっと付き合っつると、フツと開ける。そのきっかけが絵や俳句の人もいれば、畑仕事だった人もいます。そんなのも、文化芸術のひとつだと私は思ってますけどね。

考えてみれば、いまの日本は経済的うつ状態ですよ。これを打開するのに、文化的芸術的に行動することが必要だと……そう思ったから、私は文化庁長官になつたんです。文化芸術を活性化することが、経済活性化にもつながると。メセナという面を言うと、いま「お金が余つたからやってみようじゃない」という、文化的なことに意味を求める中小企業からの参加が増えてきてます。私はこれ、非常に健全な姿だと思えますね。

マリ 皆さん、こんにちは。芸術は国の繁栄の指標でもあり、海外では税制優遇することで一般の人に投資を引き受けてもらい、育ててもらおうとする風潮も古くから根づいてるようです。一方で一時期は「企業がこんなに金を出すのか」というほどの勢いでしたが、いま冷えきつたところで日本の芸術文化の考え方はどうなんでしょうか？

本日は芸術にかかわっていらつしやるお三方に、ご自身の考え方を含めてうかがっていきたくと思います。まず最初に、地元出身の黒川先生のほうからお願ひしたいと思ひます。

黒川 経済と文化の関係は、非常に面白い段階に入つたと思ひますね。「情報化社会」「ITビジネス」「ホリエモン」なんて言ひますが、じゃあ情報化社会の価値って何だろうと考えると、インターネットの基盤整備ができてるってことじゃあない。その中を流れるコンテンツが大事なんだと……つまり、情報的付加価値を大事にするのが情報化社会だということなんです。

マリ そうしたメセナを受ける側の立場で、千住さんはどうお考えですか？

千住 実は私このあいだ慶応大学に講演をしに行ったんですが、その時に「デジタルは文化かどうか」ってことで、私は「デジタルは文化ではない」という主旨を話してきたんですね。デジタルは文明ではあるが、文化というのはデジタルをいかに使うかという点にあると。

車の例もありましたが、それで言う自動車は文明だと私は思います。ただ、その乗り方は文化。日本人は車をきれいに磨いて、なかには靴を脱いでまで乗ろうとしますが、アメリカ人は買ってから売り払うまで一回も車を洗ったことない人が半分くらいいる。車はつまりスニーカーであると考えた場合に、アメリカの車文化が見えてくるんですね。これを掘り下げていくと、黒川先生がおっしゃった「多様化時代の個性」というものの、何か鍵穴が見えてくるんじゃないかと思えます。

そして、河合先生の「畑仕事も芸術の一つ」なんてのは、とても興味深いお話でした。私は常々芸術の二大横綱って、ゲーテと料理だと思ってきました。そうした視点で見た場合でも、やはり現代人に一番足りないのは芸術なんですよ。いま非常に追い詰められた中にある、芸術的なものがそが打開策とか鍵穴になり得る。この二十一世紀の高度文明社会に至る中で、どこかに置き忘れてしまったもの、それは人の心だと思いませんか。本当のコミュニケーション、そしてイマジネーション。それ抜きに近代化がひた走ると、本来人間が持つてゐるものが後手に回ってしまうんです。

たとえば、つくばに学園都市ってありますよね。あれは街を造ってから人を押し込んだために、いま研究者の中には心の病を持つ人が多くなったと聞きました。このように、都市を先に造って人を後でハマ込むのはうまくいかないでしょうか。どうですか、黒川先生。

黒川 情報化時代になると、都市は徹底的に変わります。一九六二年にも大議論がありましたし、その後「第三の波」のトフラーも著しましたが、そこでの彼らの結論は「SOHO化などで」都市はいらなくなる」という

ものでした。私は、そりゃあり得ないと。ベルが電話を普及させた時にも、同じような議論をしてるんです。

「人に会う必要がなくなるんだから都市も田園的に成り立つ」と。私たちは、頑としてそれらに異論を唱えています。確かに、住むだけなら山でも海でもいい。でも、人が会うために都市はあるんだと。電話でもインターネットでも便利なものが登場する度に、人の交流は活性化される。それが情報化社会の特徴なんです。

たとえば、かつて日本には路地があつたものですが、どんどん捨てられ、その代わりに広場を増やそうとした。でも、広場つてのはヨーロッパのものでね。ヨーロッパの都市つてのは、中心に広場や市役所や教会などがあつて、そこから放射状に道路が伸びてる。彼らは、そのほうがコントロールしやすいと考えた。そういう都市じゃなくて、日本の場合は地域ごとに独自の路地文化があつたんです。そこが、人と人とのコミュニケーションの場だつた。そうした独自のものが国際的になっていったら面白いと思うんですがね。

マリ 河合さん、いかがですか？

河合 確かに、こういう取り組みはほとんどやるべきだと思えますね。まあ私も日本中あちこち行きますが、それぞれの地域で結構面白い文化を持つてゐるんですよ。持つてゐるのに、何かにつけて東京が中心であるようなことになつてて、もつとこう、それぞれの地域をアピールする打開策を考えたいと思えますね。

マリ 先ほど「つくばに心の病の方が多い」という話がありました。落ち込むことは、ある意味、芸術にも通じますよね。落ち込んで、乗り越えて、そして新しいものが生まれてという。:

千住 ただね、落ち込めば何でもいいわけじゃなくて、正しく落ち込まないとダメなんですよ。いまの落ち込み方つて、インターネットやゲームのように非現実感の中でのことが多くて、人を刺したらどうなるかがわからなかつたりする。「あ、死んじゃつた」じゃ済まない。これが、いまの日本の歪みなんですよ。

いま海外で「日本の文化って何だ」と聞くと、アニメだ

とか、そこから派生したようなアートだとか、いわゆるパッチャルなものを答える人が多い。でも本当に日本に必要なものは、リアリティなんです。僕なんか、アトリエで絵を描いてますと、「ふと我に返る」ってことが多々あります。僕は、そんなふうに正しく引きこもり、正しく落ち込んでる自覚があります。

河合 「正しく落ち込む」というのは、言い得て妙ですね。ちゃんとした人間関係が、背後にあるかどうか。これは一種の冗談ですが、インターネットが発達して地域から世界の気候まで瞬時にわかるのに、家の中に吹いてる風や奥さんの低気圧はわからないという……やはり、人と人が会うつてのはすごく大事なことで、それを忘れて落ち込んでちゃダメですよ。

マリ 黒川先生はいつも「共生の時代」とおっしゃってますが、こうした経済と文化の共生の中で、どうアクションすればいいとお考えですか？

黒川 我々の人生で、「生きてたな」と思えるのは、恐らく感動した時ですよ。じゃあ、一人ひとりが誰かを感動させられる人間になればいい。もともと日本人には優れた人間味という潜在能力が備わってますから、それぞれの能力を発揮すれば大丈夫ですよ。私の小中学生時代を振り返ってみても、その中で出会った六人ほどの先生をすぐに思い出します。事実、感動させられたから覚えてる。教育現場では毎日が感動の連続でしょう、子どもから先生にだって感動を与えられるわけですから。そうした感動こそが、人間を磨いていく。:ということ、文化って感動することかもしれないですね。感動するつてことは、ひいては創造力につながるもんだと思えますよ。

これは私が公共建築を手がける時によくある話ですが、たとえば「ここに壁画が欲しい、千住さんお願いします」と提案したとします。すると必ず、「まず議会とか委員会を通しましょう」となる。で、議会へ行くと、「千住さんでもいいけど、こんな人もいる」と数十人の名が出てくる。「じゃ、どうする」「みんな投票して決めましょう」となっちゃう。僕は、言ってます。「小沢征爾

のコンサート聞きたい』つて時に、『他にも指揮者はいるから議会かけよう』なんて言わないでしよう』と。それでも役所は、『国民に対して理由付けができるから』と『言う。』「ちよつと待つてください」と。芸術、あるいは文化に対して接する方法が、民主的な投票しかないとしたら、それはどうしようもない役所システムのネックですよ。せつかく世界に誇れる日本の芸術家も、日本には残りにくくなつちゃう。

いろんな形であるコンペにしても、同様です。理念やデザインそつちのけで、『あなたは一番良かったからお願ひするんですよ』と言われたらたまりませんよ。頼まれ方が違ふんです。ストレートに『あなたにつくつてもらいたい』と言われれば、そりゃ感動して『よし、やるぞ』となるでしょう。強烈なリーダーシップ、『すべての責任は俺が取る』というような人がいて初めて文化は育つ。私は、そう考えてますね。

河合 そうですね、考えてみたら『無難な芸術』なんておかしいわけですね。私はいつも文化庁の人に『みんなせつかく官僚なつたんだから、死ぬまでにせめて一度は前例にないことを、『俺はこれをやつたんだ』と『言えるようにしよう』』と言つてるんですが……。

ただ、難しいのは『感動は主観的だ』ということですね。人を選ぶことなら、相当にね。しかし、コンクールやコンペの時は誰かが頑張つてほしいと思ひますし、我々もできる限り考えたいと思ひます。

マリ 千住さん、芸術家としてそういう体験は？
千住 体験だらけの話で……ただ、ちよつと見えてきたかなと思つたのは、農耕民族と狩猟民族の違いが関係してないかということですね。農耕民族は、稲を植える時はみんなで稲を植えときゃいい。そんな時にひとり、トマトを植えてたら『お前は何か？』つてことになる。ところが狩猟民族は、『お前は別のを追つてくれ、頼むから』という話になると。結局、突出してない生き残つていけなかつた欧米に対して、日本では奇抜さが受け入れられない土壌があつたんでしよう。確かに、試験のような減点法じゃ突出したものを採るなんて無理です。

ここで必要なのは、何かもつと新しい枠組みをつくつていく方法じゃないかと思ひます。

また、玉石混合という考え方もある。宝石を磨くには石がないと磨けない、宝石同士だとお互い傷つけ合つてしまふから……そういうことを、芸大の学長から伺つたことがありますね。

河合 少数精鋭に選ぶと、みんなケンカするのに熱心になりますからね。

千住 事実、私が芸大の博士課程時代、『なんでこんな小さい部屋に三人も五人も学生取るんだ』と思ひました。それはでも、玉石混合という考え方がいい。石だと思つた奴が、いつのまにか宝石になることもありまふから。日本でこれから新しい才能、新しい文化をつくろうと考へた場合、旧来システムだけじゃなかなか芽が出ない、埋もれてしまふ。そこで黒川先生のおっしゃる『文化の目利き』が必要かなと思ひます。

たとえば、私はフィラデルフィア美術館が世界で一番いいと思つてるんですね。何故かつていうと、入つてすぐの第一室の絵を見るだけで『これは優れたディレクターがかかつてるな』とわかります。そのディレクターを連れて来るのができた行政が凄いですね。彼を抜擢した文化担当官は優秀だなと……やはり、最も求められるのは行政の自覚のような気がします。

黒川 これ本当の話なんですけど、東京に国立近代美術館つてあるでしょ。僕、あそこで回顧展やろうとしたことがあつたのね。『やつてもらえませんか？』と打診した。『ちよつと検討させてください』つてんで一週間後行つたら、『生きてる方のワンマンショーは内規に引つかりまして……』と言つ。初めてでしたよ、『死んでくれ』なんて遠回しに言われたのは。こんなところに、行政の問題が凝縮されてありますよ。

マリ 日本と欧米の大きな違いの一つは、ボードメンバーが各美術館にいるということでしょうか。
河合 いや、日本も行政側が選ぶなんてことはもうないですよ。みんなボードメンバーなんですけど、難しいのはそのメンバーさへみんな農耕民族なんです。

マリ 黒川さんがよく『明治時代から断ち切られてないものがある』とおつしやられますが、本来美術専門家を置くべきところ、行政天下りの館長があまりにも多過ぎるというのも問題では？

河合 いや、これもまた難しい。ようやく館長には大学教授や民間学識者の方々が相当出てきましたが、ただ、この大学教授というの、横から口を出すには天才的なんですけど、長になつたとたんへなへなするといふ……いや、これは自戒を込めて言つてます。

黒川 歴史的に見ると、イギリスでもビクトリア王朝時代は大バブルでした。一時のオスマントルコも、エジプトも。しかし日本みたいに、それをたつた十年で終わらせなかつた。私は当時の日銀総裁の三重野さんとも、大議論をしたことがあります。あの人が『バブルは悪だ、俺は正義の味方だ』と言つたので、『たつた十年で結論を出すのは早過ぎる』と言ひ返した。バブルを潰すのは簡単でも、つくり出すのは大変なんです。長期的に、百年スパンくらいで見えていきましよう。

世界遺産を見ればわかりますよ、何が大切なのかは。それらはその国民の誇りとして後世にまで伝えられる唯一のものなんだと。経済の発展によって得たお金で、どんなふうにも素晴らしい街、生活環境、自然保全を実現していくかということですよ。それだけが結局、半永久的に残るわけで……文化経済が大事だといふ根本的理由はそこですね。

マリ 冒頭に言ひました税制優遇面からの話ですと、グッゲンハイム美術館もスミソニアン博物館も、個人やファミリーの投資がいまは立派な文化遺産になつていくということですよ。

黒川 フランク・ロイド・ライトの設計したシカゴにあるいくつかの住宅も、あるいは白川郷の設計者不詳の合掌造りの民家にしても、どちらも世界遺産です。巨大な建物じゃなくて一軒の民間住宅でも、それが本当に素晴らしければいつか評価される。重要なのは、意識改革ですよ。せつかく世界第二位の経済を誇る日本が、果たして現代の世界遺産をどれだけ残せるんでしよう。

過去の歴史だけに頼っているのは、ちょっと無責任ですね。たとえ予算はなくとも、一つひとつ後世に残る文化として取り組むんだという意気が大事なんじゃないでしょうか。

マリ たとえば千住さんの絵を買い集めている方がいたとして、いずれ千住さんが亡くなった時、その方が千住美術館をつくるかもしれないし、行政がつくるかもしれない。いかがですか、千住さんはいまの日本をどう変えていけばいいという？

千住 たとえばオランダの例がありまして、あそこは芸術家みんな無税なんです。家もタダで与えられる。でも、だから本物の芸術家が出ないと言われるんです。「芸術は道徳の中でこそ育つ」というのは、結構真理を突いてると思います。「なにくそ」という思い、あるいは不屈の精神とかネバリーギアアップ魂とかは、芸術家には必須要素でしょう。

そして黒川先生がおっしゃられた「死んでください」の出来事は私も経験してまして、人ごとじゃないなあと思いました。ただ私は、その時非常に希望が持てたんです。というの、若いキュレーターたちが「それじゃいけない」ってことにすでに気づいてて努力してくれまして、そして出してきた苦肉の策が、「グループ展ならいいだろう」というもので、私と狩野永徳の展覧会が初めて国立近代美術館で実現しました。これはもう、行政の中に本気で「変えよう」と思う人がいたからこそできたことで、そうした面ではまだまだ日本は過渡期ですね。

結局私たちは、質のいい作品をつくっていくしかありません。それを認めてもらえるかどうか、それを達成するためには、やはり黒川先生がおっしゃったように人と会うことしかないでしょう。コミュニケーションを図って信じ合える関係をつくる。その前に、とにかく絵を描く。鍵穴はそこにしかありません。

黒川 先日、外務省の事務次官から呼ばれまして、「いよいよ文化外交をやりますが、何かご意見ございませぬか」と。私は中国と親しくなって二十三年経つんです

が、それで中国のODA(経済援助)について話し合いました。これ(ODA)は発展途上国にするもので、中国はもう十分経済が潤ってきたからいいだろうと。その代わり、文化サポートをしっかりとやらうかと。中国にも、日本文化を熱烈に研究してる人がいるんですね。彼らは自ら、日本の著書を中国語に翻訳しながら頑張っている。「じゃ、そういうところに経済援助すれば」と思うんですが、それはダメなんです。ちよつとこれはビックリしましたね、あまりにも拘り定規過ぎやしないかと。

河合 身内話になりますが、日本の役所は自らのテリトリー予算を増やすことばかりに身を削ってるんですね。予算たくさん持つてるとか威張って、低いところなんか発言権までなくなってしまう。文科省なんて、かつては一番低かった。だからこれまで、文化を口にする議員なんてまずいままです。だいたい、経済ばかり。ところが、ここ最近「文化のことを聞かせてくれ」と、党を越えた議員から引張りださなりました。私はこの機に乗じて言いたいと思ってます。いつ辞めたついでと腹くくってますから、言うべきことは言う。今日ここで話されたことは、なんなら一度もつと計画練つてですね、「誰がどう言うか」打ち合わせて考えてもいいと思います。いや、これは冗談じゃなくて。(拍手)

マリ 河合さんが決心くださったように、これからも文化芸術を高めようという人が一人でも多く現れることを願ってやみません。最後にひとことずつお願いしたいと思いますが。

千住 日本の文化財には、国宝を含めて素晴らしいものがいっぱいあります。これらが海外で認められるケースが多いというの、この国がの先、文化立国できる資質を物語っていると思います。ここからですよ、二十一世紀、世界へ発信するメッセージを打ち出していくのは。

黒川 日本文化を、文化外交で世界に知ってもらおうと同時に、他国文化を吸収する手だてをもつと図る必要もありますね。とにかく、日本が世界の中で認められ

るようにしないと。長い時間かかるとは思いますが、ぜひやらねばと思います。

河合 一つ言い忘れてましたが、私はいま文化観光という必要性を説いています。日本人あるいは外国人が日本を観光する場合において、あまりにも上っ面だけで終わらせてないかという危惧。この、日本各地の特異な魅力は、せめて数日間滞在しないと肌で感じてもらえないと思うんです。何かこう、できれば文化的な目的を持ったツアーをね、これからは奨励していきたい。国交省の方も関心を持ってくださってるんで、これも省庁の壁を破ってやろうと思ってます。

マリ はい、では時間も来てしまいましたのでここで締めさせていただきます。きょうは本当に大勢来ていただいて、ご静聴ありがとうございました。

- 黒川紀章
(建築家、日本芸術院会員)
- 河合隼雄
(文化庁長官)
- 千住 博
(画家、京都造形芸術大学副学長)
- マリ・クリスティーン
(異文化コミュニケーター)